慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イギリス経済史研究と野村先生
Sub Title	Prof. Nomura on the study of the English economic history in Japan
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.10/11 (1960. 11) ,p.950(138)- 955(143)
JaLC DOI	10.14991/001.19601101-0138
Abstract	
Notes	野村兼太郎博士追悼
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19601101-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イギリス経済史研究と野村先生

高村象平

一

野村先生がイギリス経済史の研究に着手されたのは、慶大卒業後まもなくのことであったようであるが、わが国の学界にこの分野の労作を発表されるようになったのは、先生がイギリス留学の途にのぼられた直後刊行された「アシュレー英国経済史及学説（上巻）、大正一一年七月、岩波書店」の翻訳を除けば、帰国（大正一四年二月）ののちであった。その第一声は本誌第一九巻第七号（大正一四年七月）に掲載の「英国都市起源考」である。爾来同年十月の本誌に「近世初期に於ける英蘭通商関係と Methuen 条約」、翌一五年一月には「古代英国経済史考断片」、三月に「第十九世紀英国貿易概論」、六月に「英蘭徒弟制度の変遷」、十二月に「Liber Albus に現れたる倫敦の経済生活」の論文、そしてこの年の四月には「近世商業史、改造社」、五月に「経済史研究（第一巻）、叢文閣」と題する著書を公けにされている。帰国後、年余にして学術論文六篇と著書二冊を世に送る。先生の生涯を飾った尨大な数の労作発表はすでにその片鱗を示したのである。

そののちの先生のイギリス経済史に関する業績は、「野村博士還暦記念論文集、封建制と資本制、昭和三一年三月、有斐閣」の七二七頁以下の著作目録の記載にゆずってここに転載することは省略するが、上記の論著を含めてこの分野の著書六冊、論文三〇余篇にのぼる。量的に多いのみならず、質的にみてもいずれも卓抜なものであったことは、すでにわが国の経済史学界において定評のあるところである。ことに「アシュレー英国経済史及学説、昭和七年四月、岩波書店」の完訳や、「英国経済史概論、昭和一一年五月、南郊社」、「英国資本主義の成立過程、昭和一二年十一月、有斐閣」の著書がわが学界に裨益したところはすこぶる甚大であった。

二

明治期以降におけるわが国の西洋経済史研究が、対象としてイギリス、そして商業・貿易・交通等の流通過程に、最初着目されたことは、かつて私が本学会編纂の「日本における経済学の百年（上巻）」において指摘したところであるが、大正末期から昭和初期にかけて西洋経済史学が本格的な研究段階にはいった際の代表的経済史家・野村先生も、その研究過程はほぼ似るところがあった。相違するところは、研究態度であった。すなわち、それまでは外国の研究者の概説の翻案ないしそれの紹介が実相であったのに対して、この旧来の研究態度を一蹶して、日本の学者・野村の頭脳を経た独自の解釈をその研究の前面に押しだされたのである。現在においてこそこれは研究者の当然とるべき態度であって、なんら問題となるところはないのであるが、野村先生は西洋経済史わけてもイギリス経済史の研究の先達として、この本来の方途をあとに続こうとする者に明示されたのであった。

前記「英国資本主義の成立過程」は先生の学位請求論文となったものであるが、この書の序文に、イギリス経済史研究について先生が抱かれた根本観照を知ることができる章句がある。「私が英国経済史をその研究の第一に取上げたのは、英国が現在の資本主義的社会制度の先駆者であり、又英国におけるその発達過程が一般に典型的なものと考へられてゐるからであつた。しかし資本主義は英国に発展したやうな型、もしくは過程を以つて何処の国でも発展して行つたわけではない。独逸には独逸のやうな資本主義が、露西亜には露西亜に相応しい資本主義が勃興した。それと同じやうに英国には英国特殊の資本主義が構成されたのであつた。従つて英国資本主義を典型的なものとして、他の国国のそれに反する部分を異質的な、又は特殊的なものと考へる思考方法は正しいと思はれない。英国人はさう考へるのが当然と思つてゐるかも知れないが、各国の発展は決して一様に率することは出来ない。その意味で私は英国資本主義の形成を英国独特のものと考へる。」（序、四頁）

では野村先生はイギリス資本主義の成立過程をどのような史実に即して把握されようとしたのか。これはこの書の篇別――第一篇市民階級の勃興、第二篇商業資本の活躍、第三篇産業革命への途――を見ることによって一応見当はつくが、本書よりも九年前に上梓された「英国資本主義成立史、昭和三年十二月、改造社」の序文に大綱が記述されている。「現在の英国資本主義制度を樹立するに至る経過を見ると、そこに純粋英国民の国民的発展と云ふ社会的潮流を発見することが出来る。即ちアングロ・サクソン民族の勃興的勢力は一方中世以来の市民階級の発展となり、他方近世初期の海外に於ける商業的活動となつた。そこで私は一方市民階級の活動の根柢である都市の発達を探り、他方近世に於ける資本蓄積の基礎となれる海外発展の経過を辿つて見た。そして英国に於ける産業革命勃発の必然的因由をその点に帰した。即ち英国資本主義制度成立の根本的原因と見做したのである。」（序、四五頁）

これは中世以降における都市と市民階級の発達が対外商業に伸びる資本的基礎をつくりだし、この貿易による資本蓄積が産業革命発生の基因となるという見方である。ただこの両書公刊の間に横たわる九年間に、先生は産業革命を可能ならしめた資本がひとり対外貿易によって獲得されたのみでなく、これと並んでイギリス商業資本が国内諸産業をも支配するにいたった事情も指摘されるようにな

り、さらにエンクロージャ運動による労働者階級の生成の問題もとりあげられた。（英国資本主義の成立過程、第二篇第二章商業資本と国内産業、第三篇第二章労働者階級の生成を参照。）それだけ前著に比して、イギリス資本主義成立の原因の探究は深められたのである。しかしながら、これは資本主義自体についての根本的見解によって決定されることであるが、先生の「成立過程」を全体としてみると、商業資本の発達に力点が置かれており、農業や土地制度の面への言及は、それらの重要性を認めつつもなお比較的にすくない。この点がのちに大塚久雄教授の批判するところとなったのである。

しかも近代資本主義の成立の起動力を商業資本に置く見方は、ひとり先生の「成立史」、「成立過程」の両著を特色づけているばかりではない。イギリス経済史に関する先生の概説書にもこの特徴は現われている。昭和四年に改造社の経済学全集の一冊として「各国経済史」と題する英・独・仏・米・露の諸国の経済史概説が刊行された。諸国の通史を一本にまとめたものは当時まだわが国になかったから、その意味においてもこの書は歓迎されたのであったが、このとき先生はイギリス経済史の項を担当された。ただし紙数の関係から、産業革命以前で筆を擱かれている。そののち、産業革命、その影響、自由放任に対する反動、自由主義の没落等の史的展開を題材とする論文を「三田評論」に連載されたが、これらを前記のイギリス経済史と併せて一本にまとめられたのが、昭和一一年の「英国経済史概論」である。この概説において、先生は中世封建制度の章において、また近世初期の農業革命の節や、産業革命にともなう農業組織の変化の節において、農業問題、土地問題に関説はされているのであるが、しかもなおイギリス資本主義の発展については商業・工業の分野に一層多くの紙数が割かれている。

これについては、「成立過程」の序文において、「旧著（英国資本主義成立史）と比較すれば、旧著の第一章は全部廃棄した」（三頁）と述べられており、また事実その通りなのであるが、しかしその廃棄された「成立史」の第一章「総論」の、ことに第三節「英国資本主義制度の起源」に説かれているところが、あとあとまで先生の考えのなかに残っていて、そのために資本の本源的蓄積について、国内商業・金融業・外国貿易の発展・商業資本の工業支配の面を強調されることになったと思われるのである。すなわち先生の表現をもってすればつぎの章句がこれにあたる。

「英国に於いて近世の資本主義的活動を（中略）行なつたものは当時の権力階級ではない。又地方の土地所有者でもなかつた。少くとも英国に於いては土地に依つて得られた余剰の蓄積が今日の活動の資本となつたとも考へられないし、又さう云ふ地主階級が直接活動に従事したとも思はれない。勿論彼等の中のある少数者が新しい活動に従事し、又彼等がすでに有する地位、及び財産に依つて、それを有さぬ他の者よりも便宜を得たことであらう。然しこれを以つて一般的断定となすことは出来ない。新しく勃興して来た階級は市民であつて地主ではない。」（八五頁）そして近世初期における商業活動について、先生はウィリアム・カニンガムとともに「商業は産業の進歩と資本主義の発生を刺戟する手段であつた」となし、ついで「農業上の一大変革――開放耕地制度から国墻的牧羊制度への変遷、所謂農業革命に就いて論ずべきではあるが、私はこの変遷に依つて生じた農業の資本主義化は寧ろ上述の商業発展の附随的結果と見るが故に、敢てこれを省略した」（九六―七頁）といわれているもの、これである。

先生と先生に続く世代の研究者とが、イギリス資本主義の成立過程を解明する場合に置く視角には、かなりの開きがあった。そのいずれを是としまたは非とするかの批判はここには不要である。上述の分析視角をもって先生がイギリス経済史をまとめあげられたという事実が、わが国の西洋経済史学界においては重要なのであった。

三

先生は大正一一年五月から一四年二月までのヨーロッパ留学期の大部分を、ケンブリッジ大学キングスコレジでの修学にあてられた。チューターはジョン・ハロルド・クラッパム博士。先生がリサーチ・スチューデントとして学生生活を送られたのは、サァ・ウィリアム・ジェームズ・アシュリーの指示による。

いまここにアシュリー教授がイギリス経済史家として占める学的地位について縷々述べる要はないが、教授の「イギリス経済史及び学説」と「イギリスの経済組織」との両著は、均衡のとれた体系を具えた本格的経済史書として、単にその著者アシュリーを経済史家の第一人者として内外に認めさせたのみでなく、イギリスにおいて経済史という分野を確立せしめる礎石となったものであった。現在と違って半世紀余も前の刊行当時にあって、経済史的資料は限られていたにも拘わらず、「そのすくない資料を十分に駆使して」「イギリス経済史の基本的形態を明瞭に指示した」（野村兼太郎「アシュリイ」、社会経済史大系、第九巻、社会経済史家評伝、昭和三五年八月、弘文堂、五七頁）のであった。このアシュリー教授が先生に、「学問的にも人間的にも適当であるとしてとくに推挙された」クラッパム博士は（野村兼太郎「サァ・ウィリアム・ジェムズ・アシュリイ」、社会経済史学、第一六巻第三号、昭和二五年九月、八九頁）、もっと実証的な学者である。事実をしてすべてを語らしめることが、数字をできるかぎり利用することと並んで、クラッパム教授の学問的特色であった。その大著「近代ブリテン経済史」三巻や「フランス及びドイツの経済発展」はこの根本主張をもって貫ぬかれている。先生はクラッパム教授からかなり多くの影響を受けられた。これを先生自身の言葉をもって述べよう。

「人間の頭脳が偉大な働きをすることは事実である。しかし人間は誤り多きものである。頭の中で考へたことと事実とは必ずしも一致しない。事実を知つて後、人間の発展を考へる方が幾分なりとも正しい解決に近いものを得ることが出来よう。論理的にかくあるべき筈と思ふことが必ずしも実際と一致しないのは、論理的に誤りがあることもあるが、それよりも実際の複雑な過程を単純化するところにあるのだらう。単純な機念的な発展史論には飽き足らぬ感じをもつようになつた。事実であるといふことを自分に納得のゆくやうに実証したい。しかしそれは決して容易なことではなかつたのでお

る。」

「滞英三箇年の生活はさうした疑惑と希望とのうちに、何ら纒つた成果を挙げ得ないで消耗されてしまつたのである。しかし全然無駄であつたとは思はない。イギリスの学者のあまりにも実用主義的な研究方法には飽き足りなく思ひながらも、その実証的な態度には教へらるるところが多かつた。事実を知るといふことは歴史の根本的な要件である。しかし何が事実であるかを実証しようとすれば、該博な知識と鋭敏な洞察力と判断力とを必要とする。イギリス経済史の根本資料を考察するに際しても、その民族に関して十分な理解がなければ、満足すべき結果には到達しない。実証せんとして細部に進めば進むほど、言語の理解の不足を感ずる。一通りの意味は解つても、本当の意味は把握し得ない。結局懊悩しつつ月日を送つたに過ぎなかつたが、概念的議論に対する疑惑は一層強くならざるを得なかつた。」（日本社会経済史、第一巻、昭和二五年三月、ダイヤモンド社、序、三―四頁。）

これが先生の三ヵ年間の留学の獲物であった。そしてそれを纒められたのが既掲の諸論文であり、諸著書であったのである。

四

本文七〇〇頁の「英国資本主義の成立過程」は、昭和一〇年代におけるわが西洋経済史学界の最大収穫の一つであるが、その序文に「本書は英国民の発展を端的に説明したものではないから、細部の叙述に眩惑されて読者の理解を困難ならしめるかも知れない。しかしこの細部の検討が、――一般には如何でもよいと思はれることが、全体の理解に重要な意義を有することを認むる時に、学問の進歩を促がす原動力となるのであるから、学問的研究の特徴として寛恕されたい」（五―六頁）といわれている。しかし本書に見られる細部の検討よりも一層細部の個別的な研究が、そののちのわが国における西洋経済史学界における研究動向となっていった。外国の経済史専門雑誌や地方史研究雑誌が、研究上に多く参照されるのみならず、直接原資料にあたって考察することが活潑となったのである。この動向は第二次世界大戦後においてことに著しい。それはわが国の西洋経済史研究をわが学界だけで通用する程度にとどめないで、世界的水準に引きあげるために払わざるを得ない努力であった。

しかしながら実証的研究が進められてゆくにしたがって予期しないことが問題となって現われた。これを前記の「成立過程」をイギリス経済史研究の最後の成果とし、爾来日本経済史の研鑽に主力を注ぐようになった先生の体験に基づく発言によって示そう。

一つの問題は、「事実は普通考へるほど明瞭なことでないといふことである。殊に如何なる原資料も決して事実そのものを示してゐるものではない。過去に起つた事実の残骸であるか、又は事実に対するある個人の主観的判断に過ぎない。事実そのものではない。われわれが史料としてそれらを取扱ふ場合には勿論客観的に、科学的に観察しなければならないが、それらを通じてその背後に実在したと思はれる事実を推定する場合には、どうしても史家の想像力に依存せざるを得ない。その想像力は幾多の客観的条件に依つて制約されるけれども、なほ史家の主観的判断が混らざるを得ない。ただその主観的判断は史家が現在有つ感情や利害関係から下さるべきものではなく、その資料が作られた当時の社会全体に対する史家の理解から下さるべきものである。その時それは始めて単なる主観的判断ではなくなる。しかしこれは果たして史家にとつて可能なのであらうか。」

「他の一つの問題は全体と個との関係である。文書記録等を探索してゐると次第に細かい点に興味が出て来る。かつ多くの事件がそれぞれ異色があり、特長がある。それらを一概に概括して述べることが不可能になつて来る。歴史は勿論個別的現象であるから、科学のやうに共通点だけを抽出してしまつては意味はない。H_2Oといふ水を研究するのではなく、もし水を歴史に取扱ふ場合があるとすれば、ある特定の水でなければならない。勿論さうした個個の現象は全体の現象と無関係ではない。個は全体に依つて制約されてゐる。しかし全体はこれを既成概念から離れて把握することは頗る困難である。ただ個を通じてのみ知ることが出来るのである。それは個は個としての独自のものをもつてはゐるが、全然全体を離れて生じたものではない。全体の一部であると同時に、個のうちに全体性を包含してゐる。従つてただ一つの個別的現象を考察しても、それが正しく把握されれば、全体の本質的な点を掴むことが出来る。しかし個個の現象をどうしたら正しく把握出来るであらうか。」

「かうした問題（中略）を理論として説明することはさして困難なことではない。又一種の循環論――個を正しく把握するのには全体を知らなければならない。全体を知るのには、個を正しく把握しなければならないといふこと――も、一つの発展論として説明し得ないことではない。しかし現実にあることを一つの事実として証明することは、それがどんなに些細なことであつても、非常に困難なことであることを知つた。ただ多くの経験に依る熟練に依つてある程度の理解に到達し得るのみである。従つて学問は自己一代の仕事ではなくして、人間永遠の仕事である。結局の解決や断定はそんなに容易に到達し得るものではない。」（日本社会経済史、第一巻、序六―八頁。）

経済史の研究にはますます細部の考証が必要となり、しかもその事実を証明することに多くの困難が感ぜられるのであるが、経済史が過去における経済事実の個別的な意義を求める学問である以上、これらの困難は客観的に実証する根本態度をもって超克されねばならない。当今わが国の西洋経済史学が特殊研究に重点を置き、ときにはその本来の課題を忘却する感すらあることに対して、先生は警告することを忘れられなかった。本年五月中央大学で開催された社会経済史学会の大会の席上において、先生は特殊と普遍との関聯について説かれた。個個の事実の客観的実証のなかから人生の意味を知ること、これは歴史――経済史の研究に従う者が弁まえている筈のことであるが、しかも事実はしばしば忘却されている。この警告を発せられてから月余にして先生は急逝された。イギリス経済史研究から離れた私ではあるが、西洋経済史学を専攻する一人として、先生の警告は長く心に留めたい。